春

小川未明

青空文庫

「なにか、楽しいことがないものかなあ。」と、おじいさんは、つくねんとすわって、考え込んでいました。

こう思っているのは、ひとり、おじいさんばかりでなかった。町の人々は思い思いにそんなことを考えていたのです。しかし、しあわせというものは、不幸と同じように、いつだれの身の上へやってくるかわからない。ちょうど、それは風のように、足音もたてずに近づくものでした。また、だれもかつて、しあわせの姿というものを見たものはなかったでしょう。

こうして、たくさんの人たちが、てんでに自分の身の上にしあわせのくるのを待っていました。

「しあわせは、いま、どこを歩いているかしらん……。そしてだれのところへ、やってくるかしらん……。」

こう考えると、まったく、不思議なものでした。そして、このしあわせにも、大きなしあわせと小さなしあわせとあったことは、むろんです。けれど、ダイヤモンドは、いくら小さくても美しく、光るように、それが、たとえ、小さなしあわせであっても、その人の一日の生活を、どんなにいきいきとさせたかしれません。

おじいさんは、なにか楽しいことがあるのを待っていました。いつものごとく火ばちにあたって考え込んでいました。すると、毎日のように、あちらの町の方から起こってくるいろいろ

な音色が、ちょうど、なつかしい、遠くの音楽を聞くように、おじいさんの耳に達してきたのでした。

おじいさんは、だまって、じっとして、その音に耳を傾けていました。すると、このいろいろの音色の中から、ひとつ離れて、細く澄んだ音が、おじいさんの魂を引きつけるように、呼びかけているのが聞こえたのです。それは、笛の音に似ていました。

「あれは、なんの音だろう?」と、おじいさんは、思いました。

おじいさんは、その音を聞いているうちに、だんだん、気持ちがさわやかになってきました。そして、家にばかりいたのでは、気がふさいでしかたがない、町へ出て、歩いてみようという考えが起こったのです。

「寒いけれど、降りもしまいな。」といって、おじいさんは、つえをついて、とぼとぼと外へ出かけました。

いつ歩いてみても、町はにぎやかです。しかし、風が寒いので、通る人々は、道を急いでいました。

おじいさんは、右を見たり、左を見たりしてきますと、四つ辻の角のところで、福寿草を道に並べて売っていました。

「ああ、これは、いいものが目にはいった。」といって、おじいさんは立ち止まり一鉢買って、喜んで家へ帰りました。おじいさんは、それに水をやり、日当たりのいいところへ出してやり

ました。つぼみは日にまし大きくなった。おじいさんは、花の咲くのを楽しんだのであります。

＊　＊　＊　＊

また、同じ町に住んで、このようにじっとすわって、しあわせを願ったものは、おじいさんばかりでありません。

哀れな母親がありました。その日の昼前のこと、子供が見えなくなったのです。八方探したけれどわからなかった。子供は、まだ、幼かったので、道を迷って、知らぬ間に、どこか遠方の方へいってしまったとみえます。

「お母さん、お母さん……。」と叫んで、どんなに悲しがっているであろうと思うと、母親は、子供がいなくなってから、夜も、昼も案じ暮らしていたのでした。

「どうかして、帰ってきてくれないものか。」と、ひたすらに祈っていました。

その日も、彼女は、ぼんやりと家の中で、子供のことを思いながらすわっていました。すると遠くの遠くから、町の物音が聞こえてきました。彼女は、聞くともなく、その音に耳を澄まして聞いていると、たくさんの人たちが、うず巻いている光景が目に映ったのでした。すると、たちまち、ひとつ小さな、細い、さびしい音が別に耳に聞かれたのでした。それは、ちょうど、道に迷った、自分の子供を思わせたのであります。

「ほんとうに、あんなように、私の子供は、みんなから離れて、道に迷っているのだ……。」と、母親は、目にいっぱい涙をためて、熱心に、この小さな、ひとり離れて聞こえる音に、耳

を傾けていました。

その小さな音は、あてもなく、広い道の上を漂っているのでした。しかし、思いなしか、だんだん、その小さな音は、こちらへ近づいてくるような気がされたのです。

「ああ、あの音が、私のかわいい子供であってくれればいい。」と、哀れな母親は思いました。

彼女は、もはや、こうして、じっとして、家の中にすわっていることができなかった。それで、戸口から外へ出ました。

もう、日は暮れかかって、町には、燈火がついていました。

彼女は、あてもなく、にぎやかな通りの方へ歩いていった。このとき、淡いもやのかかっているうちから、小さな黒い影が現れて、こちらへ近づいてきました。それはまちがいもなく、いままで、死にもの狂いになって探していた、かわいい子供でありました。

母親は、駆け寄って、子供を抱き上げると、うれしさのあまり、ものをいうこともできなく、二人は抱き合って、しばらく泣いたのであります。

＊　＊　＊　＊　＊

この不思議な、小さな音は、いったいなんでありましょうか？　いつしか、この小さな音は、町の人たちにだんだんと気づかれるようになりました。

「このごろは、毎日、晩方になると、遠くで、いい音がきこえますね。あれはなんの音でしょうか？」

「それは、どちらの方からですか。」

「町の南の方からするときもあれば、また、夕焼けのした西の海の方からすることもあります。」

「こんど、私も聞いてみましょう……。」

ある日のこと、一人の町人は、その笛の音を頼りに歩いてゆきました。町を離れ、野を越えて、その音は、あちらから聞こえてきたのでした。

「まあ、なんというたいへんに遠いところから聞こえてくる音だろう……。」

ついに海のほとりへ出ました。すると、あちらのがけの上で、少年が、海を見渡しながら笛を吹いているのでした。

「まあ、なんという危なかしいところへ、あの少年は乗って、笛を吹いているのだろう。そして、また、なんという、澄んで、遠くにまで響く笛の音だろう。」

町の人は、驚いて、帰って、そのことを近所の人たちに話しました。みんなは、こんどいっしょにいって、その少年を見とどけようといいました。そして、ふたたび笛の音が聞こえたときに、町の人々は、いってみると、少年の姿はそこになかったが、そのがけには、美しい緑色の草が一面に芽を出して、あたたかな風が海を渡って吹いてきました。みんなは、はじめて、あの笛は、春の使いが吹いたことを知ったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　6」講談社
　　1977（昭和52）年4月10日第1刷
底本の親本：「未明童話集　4」丸善
　　1930（昭和5）年7月
※表題は底本では、「春《はる》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：栗田美恵子
2018年3月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/